

【学会レビュー】

## 第3回英語教育研究会

(於 江戸川大学)

鈴木 哲平\*

16:40 ~ 17:30 懇親会

### 1. 概略

2016年9月24日、江戸川大学N棟1階会議室において、英語教育研究会が開催された。情報文化学科の主催で、今年で3年目となる。東京大学大学院の山本史郎教授をお迎えし、英語教育のアクチュアルなトピックについて毎回ご講演いただき、それを出発点として、参加者が自分じしんの体験を踏まえながら自由に議論するという形をとっている。本学の英語教員、近隣の高校の英語教員、さらに、将来英語教員を目指す大学院生など、多彩な顔ぶれが見られた(出席者総数27名)。スケジュールは以下のとおり。

(スケジュール)

13:30 学科長挨拶

13:40 ~ 14:40 基調講演「英語教育におけるアクティブラーニングのあり方」

東京大学大学院 教授 山本史郎

14:50 ~ 15:50 報告「江戸川大学における国際コミュニケーションに対する取り組み」

江戸川大学 教授 松村豊子

16:00 ~ 16:30 報告「teacher はかつてみなlearner だった

——留学の体験をどう授業に活かすか——」

江戸川大学 講師 鈴木哲平

### 2. 基調講演

今回山本先生が選ばれたテーマは、今や新しい教育の代名詞とさえ言うべき「アクティブラーニング」である。題して「私のアクティブティーチング」。以下に、講演の骨子をまとめてみたい。

議論は文科省の「アクティブラーニング」の定義を出発点とする。いわく「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。」

先生は、翻訳という行為を、このアクティブラーニングの視点からとらえなおす。川端康成の『雪国』の著名な書き出し、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。」をいかに英訳するか。問題点は「夜の底が白くなった」である。これをそのまま“The bottom of the night turned white.”としたのでは意味が通じない。ここでは、「夜の底が白くなった」の意味をいわば「目に見えるように」理解し直さなければ英語にすることはできないのである。興味深いのは、この一節が、研究会参加者によって異なる解釈を生んだことである。代表的なものを挙げれば、(1)夜の「底」とは、夜空を半球に見立てたとき、月光に照らされた地面の雪の白さである。(2)同じように夜空を半球に見立てるが、「白くなった」のは、夜明け直前の光に照らされた雪である。(3)「底」とは「奥」の意味であり(漱石にこの用例がある)、闇夜の先のほうが、夜明け

2017年1月18日受付

\* 江戸川大学 情報文化学科専任講師 欧米文化文学、英語教育

近くではのかに明るくなっている、等々。重要な点は、このどれもが誤りとは言えず、翻訳は時に「正解のない問題を解く」ことになるということである。対象に主体的に関わり、そこから自分なりの「答え」を選び取る、これこそまさに「アクティブラーニング」ではないか、と先生は結論された。

このご講演から、以下のようなことが読み取れるだろう。すなわちアクティブラーニングとは、とりわけオープン・クエスチョンに適した方法であり（知識習得に果たして向いていると言えるかは疑問である）、第二に、すでに「一方的な講義形式の教育」を受けた（自分で考えることができる）学生において成立しうるものであり、また、オープン・クエスチョンを引き受け、主観的な結論に安易に靡かない強靱な知性を持った教員によってのみ可能な方法である。つまり効果を発揮するために、きわめて条件が限られた方法だということだ。

研究会参加者、とりわけ学業に困難を抱える高校生を相手にしている複数の教員からは、文科省の提唱するアクティブラーニングは実現が困難だという感想が聞かれた。山本先生の「翻訳論＝アクティブラーニング」は、やはり教員の力量、学生の資質に拠るところが大きい。きわめて魅力的な授業ではあるが、その実現には相当の制約が付きまとう。先生は「アクティブラーニング」を実践して見せることで、文科省の構想の不備を浮き彫りにしたと言えるだろう。文科省の文言は、「一方向的に」知識を与える代わりに「アクティブラーニング」を用いるというニュアンスを含んでいる。これは学修者の能動的な参加を可能にするための前提条件を見過ごしているということになるのではないか。

### 3. 報告 (1)

松村教授からは、江戸川大学メディアコミュニケーション学部情報文化学科で行われている英語教育の紹介があった。カリキュラム構成の特徴として、(1) 英語4技能の習得、(2) 英語文化に対

する専門的理解、(3) 学科内他科目（情報）との連動、(4) 基礎教養科目（英語・海外研修）との連動を挙げる。とりわけ(3)の情報科目との連携は、学科の最大の特徴の一つであるが、それを象徴する授業として、毎年1年生前期の課題となる「デジタル絵日記」がある。学生に貸与されるパソコンで作画し、それに30 words ~ 50 wordsの英文を付すというものである。和文英訳さえも十分に練習してこなかった学生にとって、英語で文章を書く作業は、最初は負担に感じられるが、慣れていくと、短い文章をなんとか書けるようになっていく。じつはこのwritingは、江戸川大学の前身である江戸川女子短期大学以来、重視されてきた教育内容なのである。ここには本学の伝統と現代的なニーズとの調和が見られると言っていだろう。

言うまでもなく、今はまさに英語教育や英語を取り巻く環境が激変する時代である。こうした時代に対応するため、松村教授は以下のような提言をする。一つは、学科内での海外体験のさらなる拡充。もう一つは英語科目と異文化体験との連動性の強化。後者については、本学が続けてきたwriting重視の教育がやはり有効なのではないか。学生は、話すべき内容を準備することによって、自信をもってオーラル・コミュニケーションに立ち向かうことができるからである。

フロアからのコメントとして、writing重視の教育への賛同、また、異文化体験、海外研修については、金銭的問題を心配する声があがった。これは簡単に解決できる問題ではないが、大学側も何らかの支援をするなどして、克服していかねばならない課題である。

### 4. 報告 (2)

二つ目の報告として鈴木は、教員自身の留学体験を授業にどのように活かすかという問題を提起した。英語圏だけではなく、フランス語圏スイス、フランスに留学した経験の中で、はじめて留学したスイスは、公用語が4つ（ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語）存在し、複数の

言語を操る人が少なくない国である。そこは文字通り、現在広まりつつある「複言語 plurilingualism」の土地柄であり、そこで印象的だったのは、「日本人」がほとんど「日本語を話す人間」を意味するのと異なり、「スイス人」という呼称からはその人の言語状況が予測できない、つまり、個人を一人ひとりよく見なければその相手のことがわからないということであった。これは、単に語学習得という枠に収まらない事実である。外国語を学んだ人間は、2つ以上の言語が頭の中にあり、それを場面に応じてスイッチしながら、日々生活している。それが仮に、外国語の初歩的な知識だとしても。

この知見を、日々の生活、日々の授業へとあてはめてみると、重要な点が見えてくる。すなわち本学の学生は、英語力において、さまざまな習熟度の学生が混交していること、それを、ある一定の基準から画一的に見るのではなく、学生一人ひとりの個性をできる限り尊重して彼や彼女たちと接していくことである。これは、異文化体験の最も重要な部分であり、私たちが他人とかかわりあ

うあらゆる場面に応用できることではないだろうか。

## 5. まとめ

以上のように、基調講演と2つの報告がなされ、その間に活発な議論が交わされた。以下に参加者から聞かれた主たるコメントを記しておく。

学生の知的水準や関心の在り方、英語学習の経験によって、きめ細やかな対応が必要になるのではないか。授業場での工夫も大切だが、深く内在的な英語学習のモチベーションを学生の内面に育てることが不可欠なのではないか。高大連携に代表されるような、教員間の連携をさらに重視する必要があるのではないか。

本研究会は結論に達することを必ずしも目標としていない。各教員が持つ問題意識を交換し、日々の教育をより充実させていくことを目指している。2017年度も、テーマを変えつつ、再び研究会を開催する予定である。